

ローエングリン「救済」の試み

——女性主人公エルザの考察を中心に——

竹 田 利 奈

はじめに

リヒャルト・ヴァーグナー (Richard Wagner, 1813-1881) の代表作『ローエングリン』 (*Lohengrin*, 全3幕・1850年初演) は、「ロマン派オペラ三部作」最後の作品である。創作時、ヴァーグナーはドレスデンの宮廷楽長として忙しい日々を過ごしていた。また、フランスのグランド・オペラを手本として創作した『リエンツイ』 (*Rienzi*, 1842年初演) の成功を受け、作曲家としての認知度も高まっていた。しかし、独自のオペラを確立しようとして、続く『さまよえるオランダ人』 (*Der fliegende Holländer*, 1843年初演) と『タンホイザー』 (*Tannhäuser*, 1845年初演) でおこなった新たな試みは、聴衆に受け入れてもらえなかった。芸術家としての孤独を感じる中、ヴァーグナーは『ローエングリン』創作にとりかかった。

「ロマン派オペラ三部作」最初の二作品には、共通して「女性による男性主人公の救済」というモチーフが表れている。『さまよえるオランダ人』では、「死に至るまでの忠誠」を体現したゼンタが、永遠に海をさまよいつねねばならないという呪いをかけられたオランダ人を救済した。また『タンホイザー』では、エリーザベトがタンホイザーへの無私の愛を示すことで、芸術家として苦悩するタンホイザーの救済を実現している。

本稿で取り上げる『ローエングリン』にも、「救済」のモチーフが見られる。しかし、その「救済」は前二作品に比べて複雑な構造をもつように思われる。

『ローエングリ』の話の展開は、聖杯の騎士ローエングリによる公女エルザの救済と理解されることが一般的である。この観点からすると、本作品は前二作品とは逆に男性主人公による女性主人公の「救済」の物語ということになる。しかし、作品をよく見ると、エルザの救済は第1幕において完了しているように思われる。この解釈では、第2幕以降の展開の理解が困難になり、第2幕における「禁問」（質問の禁止）をめぐるやりとり、第3幕におけるローエングリのブラバント退去の意味が理解できない。

本稿では、『ローエングリ』の第2幕と第3幕での展開に注目し、第2幕における異教徒オルトルートのエルザへの働きかけの意味、および「禁問」をめぐるエルザとローエングリの緊迫したやりとりに、そして第3幕におけるエルザの裏切りと彼女の死に着目することで、『ローエングリ』の「救済のモチーフ」のより深い意味を明らかにしてゆきたい。なお本論文では、登場人物の言動を手がかりとしてモチーフ分析を行うため、楽曲への言及は控え、リブレットを中心に扱う。

第1章 「禁問」設定に隠された意味

『ローエングリ』の舞台は10世紀前半のブラバント公国であり、そこでは亡き公爵の後継者をめぐる争いが起きていた。公爵には、娘エルザとその弟ゴットフリートがいたが、エルザの元婚約者である伯爵フリードリヒが公国の支配を目論んでいた。そのため、フリードリヒはエルザを弟殺しの罪で告発し、彼女を窮地に陥らせた。エルザが、自分を救い出してくれる騎士を求めて夢想していると、その切なる願いが神のもとへと届けられ、ついに聖杯の騎士、ローエングリが白鳥に乗ってやってくる。

第1幕・第3場において、ローエングリは、エルザを救う前にある条件を彼女に言い渡した。それは、「決して素性を尋ねてはいけない」ということであった。この条件は、通常「禁問」(Frageverbot)と呼ばれている。以下、リブレットからローエングリがエルザに課した禁問の内容を引用する。

ローエン格林：

お前は私に決して質問してはならない、

また知ろうと気を遣ってはならない、

私がどこからやってきたか、

私の名前と素性が何であるかを！ (231-234)⁽¹⁾

ローエン格林はエルザに、彼がどこからやって来たのかということ、彼の名前、素性を尋ねないよう強く要求した。そしてエルザがこの条件を真摯に受け入れることで、婚姻関係が成立する。「救済者」を得たエルザは、窮地を脱することができて、すべての問題が解決したように思われる。しかし、フォスは「禁問の条件は窮地から救い出す行為と直接結びついているというより、むしろエルザとローエン格林の愛、そしてこれから始まろうとする結婚と結びつけられているように思われる」⁽²⁾と述べている。ローエン格林がエルザに課した「禁問」が、第2幕以降の展開の中心になることを考えると、フォスのこの指摘は重要である。それゆえ、ローエン格林とエルザ各々にとってこの「禁問」がどのような意味を持っているのかについて考えてみることにする。

第1節 ローエン格林にとっての「禁問」の意味

そもそもなぜローエン格林は、エルザに素性を尋ねないよう要求したのだろうか。これがすべての観客の心に浮かぶ最初の問いであろう。これに関わる彼の秘密は作品の終わり近い第3幕・第3場になって語られる。ローエン格林は、聖杯 (Gral) に仕える選ばれし騎士であり、いかなる悪にも勝つ

(1) リブレットからの引用はすべて以下に拠る。Richard Wagner: *Lohengrin*. In: Egon Voss (Hg.): *Richard Wagner. Lohengrin. Textbuch mit Varianten der Partitur*. Stuttgart: Reclam, 2001. リブレットからの引用は本文中に行数を示す。なお、日本語訳は以下を参照した。リヒャルト・ワーグナー 高辻知義訳『オペラ対訳ライブラリー ワーグナー ローエン格林』音楽之友社 2011年

(2) Ebd. S.102.

ことができる。しかし、俗世界で彼が聖杯の騎士であることが知らされると、聖なる能力は失われ、俗世界から退去しなければならないというのである⁽³⁾。この秘密を守るために、ローエングリンがエルザに条件を課したことが明らかにされる⁽⁴⁾。

すでに確認したとおり、ローエングリンがブラバント公国へ遣わされた目的は、窮地に陥ったエルザを救うことであった。しかし、作者の構想では、ローエングリンにはもう一つの目的が賦与されていたという。ヴァーグナーは『友人たちへの伝言』(*Eine Mitteilung an meine Freunde*, 1851)⁽⁵⁾で次のように述べている。

彼（ローエングリン）が求めているのは讚美や崇拜などではなく、彼を孤独から救い出し、彼の憧れを癒してくれる唯一のもの、一愛、愛されること、愛情を通じて理解されることだったのである。⁽⁶⁾

このヴァーグナーの言葉をヒントにして『ローエングリン』の「禁問」の意味を解釈すると次のように言えるだろう。ローエングリンは聖杯の騎士という高貴な身分ゆえに、ただ崇拜されることが多く、そのことに孤独を感じている。この孤独から解放されるためにローエングリンが憧れたのが、無条件に自分を愛してくれる女性、すなわちエルザであった。ローエングリンは、第3幕・第2場において、自分はエルザに出会う前から彼女の存在を予感してい

(3) Vgl. Wagner: *Lohengrin*. S.70 f.

(4) 聴衆には、すでに第2幕・第1場のオルトルートとフリードリヒの会話の場面でこの事実が明らかにされている。Vgl. Ebd. S.32 f.

(5) Richard Wagner: *Eine Mitteilung an meine Freunde*. (1851) In: Richard Wagner: *Dichtungen und Schriften. Jubiläumsausgabe in zehn Bänden*. Hrsg. von Dieter Borchmeyer. Band 6. Frankfurt am Main: Insel Verlag, 1983, S.271 f. 以下ヴァーグナーの著作からの引用は、本全集に拠り、巻数、ページ数を付す。日本語訳は以下を参照した。リヒャルト・ワーグナー（三光長治監訳、杉谷恭一、藤野一夫、高辻知義訳）『友人たちへの伝言』法政大学出版局 2012年

(6) Vgl. Wagner: *Eine Mitteilung an meine Freunde*. S.270. 強調はヴァーグナーによる。

たし、彼女を一目見た瞬間に清らかなエルザへの愛を確信したことを伝えている⁽⁷⁾。この発言から、ローエングリンは、単に正義の実現という使命のためにエルザの救済に赴いたのではなく、エルザとの結婚を切に望んでいたことが裏付けられる。そしてこの結婚を実現させるためには「禁問」が不可欠であったと考えられる。エルザがこの条件に同意したあとにローエングリンが、「エルザ、お前を愛している」⁽⁸⁾と告白した様子からも、ローエングリンの側からエルザとの結婚を望む理由が存在したことが分かるだろう。

第2節 エルザにとっての「禁問」の意味

次に、エルザが「禁問」をどのように受け止めていたのか見てゆきたい。

ローエングリンがエルザに課した条件に関して、ノイマンが「(禁問の条件を課した場面では)愛し合う者同士の力強い相互認識を証明するものはなく、ただ盲目的で、漸進的に強められた女性の服従の意志表示 (*Unterwerfungsgeste*) だけが存在する」⁽⁹⁾と述べているように、エルザには「服従」の要素が強く表れているように思われる。第1幕・第3場において、窮地に陥ったエルザはこの条件を提示された時、以下のように発言する。

エルザ：

私の庇護者、私の天使、私の無実を、

しっかりと信じてくださる救い主！

あなたへの信頼を失くすよりも

罪深い疑いなどあり得ましようか？

あなたが苦境にある私を守ってくださるように、

(7) Vgl. Wagner: *Lohengrin*. S.59 f.

(8) Ebd. S.21.

(9) Gerhard Neumann: „*Nie sollst du mich befragen*“ *Zum Ritual der Liebesprobe in Wagners Lohengrin*. In: Udo Bermbach (Hg.): *wagnerspectrum*. Heft 1/2014 10. Jahrgang. *Schwerpunkt Lohengrin*. Würzburg: Königshausen & Neumann, 2014, S.51.

あなたの命令を私は忠実に守ります！（241-246）

エルザが、「あなたへの信頼を失くすよりも罪深い疑いなどあり得ましようか」と言っていることから、庇護者、救済者であるローエングリンに全幅の信頼を寄せていることが読み取れる。この台詞の前に、ローエングリンから片時も目を離さずに「心も体もあなたにゆだねるわ」⁽¹⁰⁾と発する様子からも、エルザのローエングリンへの「服従」の意志が感じられる。エルザの発言は客観的に見ると「服従」である。しかし、エルザにとって「禁問」は「服従」というネガティブな意識からではなく、ローエングリンへの全幅の信頼から真摯に受け入れられるものであったと考えられる。この「服従」するエルザは、ローエングリンが待ち望んでいた女性であった。また、このような清らかで貞淑なエルザの姿は、19世紀の男性たちが理想とした女性像であったとされている⁽¹¹⁾。

しかし、この先の展開を追ってゆくと、エルザの気持ちに変化が生じ始め、ローエングリンとの関係が危うくなっていく様子が見られる。それには、異教の女オルトルートが深く関わっていると考えられる。第2章では、オルトルートの行動がエルザに与える影響について考察する。

第2章 善と悪の対決 — エルザとオルトルート

第1幕では、オルトルートは舞台の傍らで事の成り行きを観察しているだけで、台詞はほとんどない。一方、第2幕は、オルトルートのエルザへの働きかけが大部分を占めており、オルトルートが物語の進行を支配していると言っても過言ではない。本章では、まずオルトルートの人物像に着目し、その後、彼女のエルザへの働きかけがどのように作用したのかを考察する。

⁽¹⁰⁾ Wagner: *Lohengrin*. S.20.

⁽¹¹⁾ 三宅新三『ヴァーグナーのオペラの女性像』鳥影社 2003年 88頁を参照。

第1節 異教の女オルトルート

第2幕は、ローエングリンとの戦いに敗れたフリードリヒとその妻オルトルートの会話で始まる。復讐に燃えているのは、名誉を傷つけられたフリードリヒだけではない。実際、オルトルートもある根深い恨みを抱いており、彼女の復讐心がこの一連の騒動の引き金となっている。

まずオルトルートの復讐心の原因を見てゆく。第1幕・第1場で、オルトルートがフリーゼン族の首領ラートボート⁽¹²⁾の血を引いていることがフリードリヒによって明らかにされる。そして彼女の恨みが異教性に由来していることが、第2幕・第2場の台詞で読み取れる。

オルトルート：

辱められてきた神々よ！今私の復讐に力を貸してください！

ここであなた方に加えられた屈辱を罰してください！

あなた方の神聖な御わざに仕える私にご加勢を！

背いた者たちの無礼な思い上がりを砕いてください！

力強い神、ヴォーダン！あなたを呼びます！

崇高な女神、フライア、聞いてください！

私の行う偽りと偽善に祝福をください、

この復讐が成功するようにと！（509-516）

ヴォーダンやフライアなどキリスト教によって虐げられたゲルマンの神々に、復讐のための力を求め、神々が被った屈辱を晴らそうとしていることから、オルトルートは個人的な復讐ではなく、ゲルマン部族の代表として復讐を果たそうとしていることが分かる。そして、オルトルートは、ゲルマン部族に

(12) フリーゼン族はオランダから北ドイツへかけての北海沿岸を居住地としていたゲルマン部族である。ラートボートは彼の先祖が異教徒で地獄にいることを知ると、先祖と共にいることを望み、キリスト教の洗礼を拒んだ。ワーグナー 高辻知義訳『オペラ対訳ライブラリー』18頁を参照。

再び栄光をもたらすための計画を実行してゆく。

次にオルトルートの計画を整理したい。まず、オルトルートは公爵の死後、後継者争いの最中にあるブラバント公国の状況を利用する。通常、公爵の息子ゴットフリートが選ばれるべきだが、ゴットフリートとその姉エルザの後見人である伯爵フリードリヒはひそかに公国支配を望んでいた。この事実を知るオルトルートは、公国を支配するという共通の目的からフリードリヒの妻になり、共に復讐を成し遂げることを誓い合う。オルトルートはゴットフリートを白鳥の姿に変えて消し、フリードリヒに、弟殺しの罪をエルザにかけさせることによって、後継者争いの際に邪魔な二人を攻撃する。仮に、神明裁判によってフリードリヒが勝利していたならば、フリードリヒは公爵に、そしてオルトルートは公爵夫人になれていたであろう。しかし、その願いは白鳥の騎士ローエンゲリンの登場によって叶わぬものとなり、誰もがローエンゲリンを完全無欠なブラバント公国の庇護者 (**Schützer von Brabant**) であると認める。そしてオルトルートによって利用されたフリードリヒは、戦いに敗れ、彼にとって一番大切な名誉を失い絶望する。その一方でオルトルートはまだ復讐を諦めていなかった。というのも、彼女だけがローエンゲリンの秘密を知っていたのである。その秘密とは、エルザがローエンゲリンによって課された禁問を破れば、ローエンゲリンが聖杯の城へ帰還するというものであった。つまり、エルザが禁問を破ると、白鳥 (ゴットフリート) がローエンゲリンを聖杯の城、モンサルヴァートへ連れて帰らねばならず、ゴットフリートのブラバント帰還は叶わなくなるのである。そのため、オルトルートの次の作戦は、エルザに禁問を破らせるよう仕向けていくことであった。

キリスト教の神に恨みを持つ異教徒オルトルートは、一族の復讐のために抜きさく謀り事を実行する政治的な女性であり、また男性を支配する恐ろしい女性であることが分かる。ヴァーグナーは『ローエンゲリン』創作時に、複数の作品⁽¹³⁾を素材としているが、オルトルートはヴァーグナーが創作した登場

(13) ヴァーグナーは『ローエンゲリン』創作時、主にヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルツィファル』 (*Parzival*)、ヨーゼフ・フォン・ゲレス編纂で

人物である⁽¹⁴⁾。その創作した本人でさえ、「もっとも恐ろしい女性」(das *Furchtbarste*)⁽¹⁵⁾と表現するほどの女性であった。また、千里眼の持ち主(Seherin)⁽¹⁶⁾であるオルトルートは未来を予見できる女性である。異教性、謀り事のできる女性、男性を支配する女性、未来を知る女性がオルトルートの特徴として挙げられるが、どれもエルザとは対照的である。作品中では、オルトルートは常に邪悪な存在として位置づけられる。しかし、彼女の先を見据えた行動は、作品の展開を促進する役割を持っているため、劇作上において非常に重要な役割を担っているといえるだろう。

次に、オルトルートの働きかけがエルザにどう影響を与えたのかを、リブレットを追いつつ考察したい。

第2節 エルザの変化

「復讐」といえば、一般的に殺害などの単純な行為を思い浮かべるだろう。しかし、オルトルートの手段は、「言葉」である。彼女は巧みに言葉を使い、エルザの心を操作する。まず第2幕・第2場、結婚式の前日の場面で、オルトルートは言葉巧みにエルザの同情を誘い、彼女に接近することに成功する。そして、エルザの心をローエングリンに質問せざるを得ないよう変化させていく。

第1章・第2節において、すでに考察したように、ローエングリンのおかげで窮地を逃れたエルザは、幸せの絶頂にいる。この時、未来を予見する女性オルトルートはエルザに「今の幸せを盲目的に信じるべきではない」と忠告

↘ 作者不明の『ローエングリン』(*Lohengrin*)、グリム兄弟の『ドイツ伝説集』(*Deutsche Sagen*)を素材としている。バリー・ミリントン原著監修『ヴァーグナー大事典』平凡社 1999年 177頁を参照。

(14) Vgl. Voss 2001, S.108.

(15) Richard Wagner: *Sämtliche Briefe*. (Hg.) Gertrud Strobel und Werner Wolf. Band 4. Leipzig: VED Deutscher Verlag für Musik Leipzig, 1979, S.273. 1852年1月30日、リストに宛てて書かれた手紙に、オルトルートの特徴が記されている。

(16) 夫フリードリヒが „Du wilde Seherin!“ (恐るべき千里眼)と呼んでいる。Vgl. Wagner: *Lohengrin*. S.32.

し、同時にローエングリンが魔法の力で来たことを告げる。オルトルートの発言を受けて、エルザは次のように答える。

エルザ：

この上なく惨めなあなたはおそらく測れないのでしょうか、
どれほど私の愛が疑いの心から遠いものか？

私たちがただ信頼を通じて与えあっているような幸せを
おそらく、あなたは味わったことがないのでしょうか？

私のところへ来てください！私があなたに教えましょう、
混じりけのない誠のもたらす喜びがいかに甘美なものであるかを！

心を改めて信じるようにするといいわ、

幸せがあるのです、後悔とは無縁な幸せが！（552-559）

エルザは、ローエングリンに対する全幅の「信頼」を主張し、この幸せが続くことを確信していた。そのため、この時のエルザには、オルトルートの攻撃は全く効かなかった。

エルザの「高慢」な発言に苛立ちを覚えたオルトルートは、ついに第2幕・第4場、結婚式直前の場面で豹変し、本性を表す。オルトルートは、夫フリードリヒと共に、ローエングリンの潔白さにかがわしきがあることや、ローエングリンの素性を尋ねられないのは何か不安があるからだ、皆の前でエルザに詰め寄った。オルトルートらの発言は、これまで盲目的にローエングリンを信頼していたエルザの心に新たな感情をもたらした。その感情とは信頼と相反する「疑念」(Zweifel)であった。ローエングリンはエルザに「オルトルートの勝利はない、彼女はエルザに毒を注ぎ込むことができたか？」⁽¹⁷⁾と問い、疑念が生じたエルザを案じると、第2幕末でエルザは以下の台詞を発する。

(17) Vgl. Ebd. S.49.

エルザ：

私に救いをもたらしてくれた救い主！
私が身を消してしまいたい、我が勇士！
あらゆる疑いの力をはるかに超えて
... 私の愛はあります！（781-784）

エルザは、「あらゆる疑いの力をはるかに超えて... 私の愛はあります！」
と言い、ローエンゲリンへの信頼を維持しようとする。しかし、オルトルート
とフリードリヒによって注がれた毒はすでに効いており、エルザは「疑念」と
いう彼女にとって新しい感情を抱きながら、結婚式を迎えることになる。

第3章 エルザの行動の意味

第3幕・第2場で、エルザとローエンゲリンは初夜を迎える。二人きりで
過ごすのは、この時が最初で最後である。一見幸せそうな二人だが、オルトル
ートに注ぎ込まれた毒が回ったエルザの心底には、ローエンゲリンに対する
「疑念」が宿ったままであった。そのうえ、弟ゴットフリートの失踪問題につ
いては言及されず、未解決のままである。一方ローエンゲリンは、素直にエル
ザが禁問を守ることで、信頼による幸せが続くことを望んでいた。しかし、ロ
ーエンゲリンの説得も空しく、一度疑念が生じたエルザは禁問を破り、最後
には死に至る。本章では、エルザの行動の意味を検討し、本作品の「救済モチ
ーフ」がどのように表現されているか考察する。

第1節 エルザの裏切り

第3幕・第2場の冒頭で、エルザとローエンゲリンは二人きりになり、幸
せを歌う。歌の中で、二人は出会う前から互いの存在を予感していたことが明
らかにされる。ローエンゲリンは、「戦士」に選ばれた時にエルザを愛し、エル
ザはそれ以前に夢で見たときにローエンゲリンを愛していた。しかし、エル

ザはこの「愛」に疑問を抱き、彼女にとって最も高貴なもの、つまりローエングリンの「名前」を呼びたいという欲求に駆られる。エルザの愛は、無垢な信頼による愛から、相手を理解することを望む愛へと変化していた。エルザの願望に反し、ローエングリンの名を呼ぶことを拒否されると、エルザは次のように決意を固める。

エルザ：

ああ、私があなたにふさわしい価値をもてたら、
ただあなたの前で溶け消えるだけではないでしょうに。
何か手柄をたてて、あなたと一つになれたら、
私があなたのために苦悩を引き受けられたらいい！
あなたが重い罪の疑いをかけられた私を見出したように、
ああ、苦境に陥っているあなたを知ることができたら！
[. . .]

あなたのために死を賭してもかまわないわ！（871-886）

エルザは、ローエングリンの秘密がもたらす苦痛を引き受けることによって、彼にふさわしい価値を持った女性になることを望んでいる。そのうえ、ローエングリンのために命を捧げても構わないという発言から彼女の強い覚悟がうかがえる。

一方、ローエングリンにとって、エルザの発言は受け入れがたいものであるため、ローエングリンは、エルザにそれ以上自分の素性を尋ねないよう説得し、落ち着かせようとした。しかし、ここで同時に明らかになったのは、彼が栄光に満ちた場所からやって来て、そこで犠牲にした高貴な運命にエルザが彼女の愛で報いなければならないということであった。この発言を受けてエルザは次のように答える。

エルザ：

あなたは歓喜の世界から私のところへやってきました、
そして今やそこへ帰ることを切望しているのよ！

[...]

いつの日か、あなたは私から奪われるでしょう、
あなたが愛を後悔することで。(926-931)

エルザは、ローエンゲリンが歓喜に満ちた場所へ戻ることを望んでいると解釈し、彼への「疑念」を一層増大させた。つまり、エルザをなだめようとしたローエンゲリンの発言は、自身がいかに高貴な存在であるかを露呈したため、逆効果になってしまった。これを受けて、エルザは夢想状態に陥り、白鳥が小舟を引いてくるという妄想を始める。そして、ついにエルザは「命を失ってまでもローエンゲリンの素性を知りたい」⁽¹⁸⁾と言って、ローエンゲリンとの約束を破ってしまう。ここで、ローエンゲリンが恐れていた事態が生じてしまい、彼は孤独の世界へと帰還せねばならなくなった。つまり、エルザはローエンゲリンを孤独から救い出すことに失敗したと言える。

ローエンゲリン救済失敗の原因は、まぎれもなくエルザの心中に生じた「疑念」である。これは、未来を予見できるオルトルートの作戦通りであり、彼女の作戦はここまで順調に来ているといえるだろう。また、「ロマン派オペラ三部作」の最初の二作品で、男性主人公の救済に成功した女性、ゼンタとエリーザベトに「疑念」という感情が芽生えていなかったことを考えると、エルザだけに生じた「疑念」は救済失敗につながったと推測できる。

ローエンゲリンは、エルザの行為を「裏切り」(Verrat)と表現しているが、果たして彼女の行為を愚かと捉えて良いのだろうか。そもそも、ローエンゲリンが課した条件は、ノイマンが言うように、「ダブルバインド」の要素を含んでいる。つまり、「妻となって自分を愛せ」という命令と、「素性を知ってはいけない」という禁止の矛盾した結合が、「禁問」の性質ということになる。

(18) Vgl. Ebd. S.64.

こうした矛盾する条件のもとでは、相互理解を果たすことは困難であり、始めは一方が従ったとしてもその状態を維持することは不可能であるというノイマンの解釈に従えば、エルザに疑念が生じ、彼女がローエンゲリンに素性を尋ねたことは必然の成り行きと考えられる⁽¹⁹⁾。また、エルザがローエンゲリンと対等の女性になることを望んだ（「ああ、私があなたにふさわしい価値をもてたら、ただあなたの前で溶け消えるだけではないでしょうに。」）⁽²⁰⁾ことを考慮すれば、エルザがローエンゲリンに求めたことを「失敗」とか「裏切り」という言葉で片付けることはできないのではないだろうか。さらにエルザのローエンゲリンへの愛が真実のものであることは、エルザがローエンゲリンの為に身を犠牲にする覚悟を表明している箇所にはっきりと現れている（「ああ、苦境に陥っているあなたを知ることができたら！（…）あなたのために死を賭してもかまわないわ！」）⁽²¹⁾エルザは自らに課せられた禁問をめぐる葛藤の末、あえてローエンゲリンの名を問うことで、一方的に庇護される存在から、主体的に恋人を愛そうとする存在になることを目指したと理解する方が妥当と考えられる。

エルザに裏切られたローエンゲリンは、翌日約束通り素性を明らかにし、一人孤独に聖杯の城へと帰ってゆこうとする。そしてローエンゲリンの帰還前に、白鳥が再登場すると、オルトルートがゴットフリートを白鳥の姿に変えたことを白状し、ついにゴットフリートの復活が実現される。ローエンゲリンがブラバントを去ったあと、エルザはゴットフリートの姿を見届けると絶命する。

第2節 エルザの死の意味

『ローエンゲリン』の結末に関して、フォスは「救済の死はない。エルザの救済は拒否されたままである」⁽²²⁾と述べている通り、エルザは禁問を破った時

(19) Vgl. Neumann 2014, S.52.

(20) Wagner: *Lohengrin*. S.60.

(21) Ebd. S.60.

(22) Egon Voss: »Wagner und kein Ende« *Betrachtungen und Studien*. Zürich ↗

点で、ローエングリに救済をもたらすことができないのは明らかであった。では、なぜエルザは死ぬ必要があったのだろうか。ここではエルザの死について考えたい。

まず、「ロマン派オペラ三部作」の最初の二作品に登場する、ゼンタ、エリーザベトとエルザを比較する。『さまよえるオランダ人』のゼンタは「死に至るまでの忠誠」を示すことで、死ぬことを許されないという永遠の呪いをかけられたオランダ人を救った。また、『タンホイザー』のエリーザベトは「愛による理解」によって、精神的なヴァルトブルクと官能的なヴェーヌスの両極に引き裂かれた芸術家タンホイザーの魂を救済した。つまりゼンタとエリーザベトは、男性主人公の救済に成功したのである。一方、エルザだけがローエングリに救済に失敗している。その失敗の理由を突き詰めると、ローエングリの特権的な境遇がその原因となっていると言えるだろう。オランダ人とタンホイザーは、呪いと自らの苦悩から解放されるために、「救済」を必要としていた。ローエングリも、確かに英雄としての孤独から解放されることを望んでいた。しかし、神の指令によってエルザのもとへやって来たことから明らかなように、ローエングリは選ばれし神の僕であり、グラールの守護者という存在であったため、オランダ人やタンホイザーのような「救済」を必要としない境遇に置かれていたと言える。エルザには、愛する男性を自らの犠牲によって救済する道は最初から閉ざされていたと考えられる。つまり、ゼンタにもエリーザベトにもなれない運命にあったのである。

しかし、エルザが二人の女性と共通している唯一の点は、エルザにも男性主人公への深い「理解」や「愛」が存在していることである。作品の終盤で、弟ゴットフリートの帰還によりブラバント公国の秩序が回復される。それを見届けた後のエルザの死は、「愛に殉じた死」と見るができるように思われる。これこそが、エルザがなした唯一の「真の愛」の行為であったと考えられる。エルザはローエングリによって課された禁問を破ることで「一方的に救

↘ und Mainz : Atlantis Musikbuch-Verlag, 1996, S.81.

済される存在」の状態を脱し、自らの意志で「愛」のために死ぬ存在になつたと言えるだろう。ヴァーグナーがエルザという女性について、エルザは「愛情というもののやむにやまれぬ性質のために、(中略)破滅の淵に飛び込んでいく女性」、「破滅以外の方法では愛することができない女性」⁽²³⁾であると述べているが、この言葉はまさに上に述べたことを表現しているのだと考えられる。

エルザの死の意味を理解するために、ヴァーグナーがエルザについて詳しく述べている箇所を引用することにしたい。ヴァーグナーは、『友人たちへの伝言』の中で、次のように述べている。

私はたまりかねて嫉妬の情をぶちまける彼女にも肩を持たざるをえなかったのであって、そこに現れているのがまさしく愛情というものの純粋に人間的な実体であることを、完全に理解するようになったのである。(中略)
——エルザ、女性なるもの、——私がこれまで理解しなかった、そしていまや理解するにいたった女性——この至純にして感性的な本能の真にやむにやまれぬ本領の発現——は、私を完全な革命家にしたのであった。彼女こそ、自らの救いのために芸術人としても私がかねがね憧れていた、民衆の精神であった。⁽²⁴⁾

ローエングリンへの「愛」ゆえに禁問を破り、死を選んだエルザは、まさにヴァーグナーが言う「純粋に人間的な実体」を表していると考えられる。確かに前作品『タンホイザー』においても、エリーザベトはタンホイザーへの「愛による理解」から彼を救済した。しかしエリーザベトの愛は崇高であり、ヴァーグナー自身もその愛を把握できていなかった。「真の人間」の表現を目標とするヴァーグナーは、その後、『ローエングリン』のエルザを描くことで、ようやく自身が求めていた理想の女性像にたどり着いたことが、この引用箇所からうかがえる。孤独から解放されることを望むローエングリンと同様、孤独な

(23) Vgl. Wagner: *Eine Mitteilung an meine Freunde*. S.278.

(24) Ebd. S.278.

芸術家として聴衆の「愛」つまり「共感」による理解を求めているヴァーグナーにとって、エルザは救いとなる存在であったと考えられる。この点についてアイヒナーも、『ローエングリン』では救済が果たされなかったが、エルザの「愛による理解」がローエングリンだけでなく、作曲者にも救いをもたらすことになる」と解釈している⁽²⁵⁾。

『ローエングリン』では、ローエングリンとエルザの婚姻関係は破綻し、ローエングリンは一人孤独に聖杯の城へ帰還し、エルザは絶命する。最終的にエルザは、高貴な身分であるローエングリンを孤独から救い出すことはできなかった。しかし、より重要なのは、ローエングリンがエルザに課した「禁問」自体がエルザのローエングリンへの「愛」と相容れないということではないだろうか。禁問を課された時のエルザは確かに「無垢な信頼の状態」であった。しかしオルトルートが吹き込んだ「真の愛」のあるべき姿の理解が、「禁問」破りを生み出したと言えるだろう。

お わ り に

本稿の考察により、「ロマン派オペラ三部作」、『さまよえるオランダ人』『タンホイザー』『ローエングリン』を経て、ついにヴァーグナーはエルザという理想の女性像を得ることに成功したことが明らかになった。確かに本稿で取り上げた『ローエングリン』は、このジャンルの集大成となる作品であるが、同時に、ヴァーグナーが後に完成させた「楽劇」(Musikdrama)への過渡期的な作品とも考えられている⁽²⁶⁾。ヴァーグナーも『ローエングリン』を「オペラ」というジャンルで見るとはならず、作品そのものが一つのジャンルとして見られることを望んでいた。創作当初、ヴァーグナーは『ローエングリン』に

(25) Vgl. Barbara Eichner: *Eine Mitteilung an meine Freunde. Lebens- und Schaffensmythen in der letzten Zürcher Kunstschrift*. In: (Hg.) Christine Fornoff / Melanie Unsel: *Wagner in der Diskussion. Wagner-Gender-Mythen*. Band 13. Würzburg: Königshausen & Neumann, 2015, S.99 f.

(26) Vgl. Voss 2001, S.98.

「ロマン派オペラ」(Die romantische Oper)という副題を入れていた。しかし、この副題をつけることで作品の誤った理解につながることを防ぐために、ヴァーグナーは後にこの副題を削除した⁽²⁷⁾。

『ローエンゲリン』は、音楽的にはまだ「オペラ」の伝統が残っているが、ヴァーグナーが「オペラ」というジャンルから抜け出そうとしていたことが読み取れる部分もある。序曲(Ouverture)を前奏曲(Vorspiel)へと変更したことや、楽劇『ニーベルングの指輪』(Der Ring des Nibelungen)で頂点を迎える「ライトモチーフ」(Leitmotiv)⁽²⁸⁾の前兆が見受けられることである。また、『ローエンゲリン』から、管楽器をそれぞれ三人ずつ置き、弦楽器を複数パートに分けることで、表現の幅を大きくすることにも成功している⁽²⁹⁾。『ローエンゲリン』のリブレットが完成したのち、ヴァーグナーはリブレットの朗読会を開いたが、その場に居合わせたローベルト・シューマンは、この作品をどのように作曲するのか疑問に思ったようである⁽³⁰⁾。しかし、『ローエンゲリン』の美しい前奏曲を聞いていると、シューマンの疑念は取り越し苦労であったように思われる。

また、作品のテーマ的にも『ローエンゲリン』は過渡期的な位置にあると考えられる。ヴァーグナーの作品を貫くテーマは「救済」と言ってよいだろう。今回の考察の対象であった『ローエンゲリン』も同様である。そしてその中に、必ず「愛」と「死」の結びつきが見受けられる。この結びつきは「愛の死」(Liebestod)という言葉を生み出した『トリスタンとイゾルデ』(Tristan und Isolde)において、極致に達することになる。そしてヴァーグナーの最後の作品『パルジファル』にも「救済」のテーマが登場する。特に『パルジファ

(27) Vgl. Ebd. S.95 f.

(28) 『ヴァーグナー大事典』によると「ライトモチーフ」は「意味深い劇的瞬間や付随するテキストと連結しつつ、登場人物、事物、想念、感情を示唆する、はっきりとした連想機能を持つ楽想」である。ミリントン原著監修『ヴァーグナー大事典』315頁を引用。

(29) Sven Friedrich: *Richard Wagners Opern. Ein musikalischer Werkführer.* München: C. H. Beck, 2012, S.40.

(30) Vgl. Voss 1996, S.78 f.

ル』(*Parsifal*)は、ローエンゲリンの実の父親の物語であるため、『パルジファル』考察の際には、『ローエンゲリン』との関連を改めて問うことが必要になるだろう。

——大学院文学研究科博士課程後期課程——